

仲間集団から内在化される集団境界の評定

黒川 雅幸¹⁾ 三島 浩路²⁾ 吉田 俊和

問題と目的

小学校高学年頃から児童の仲間関係は、特定の相手との相互作用が増えることから、明確な仲間集団を形成するようになってくる (Rubin, Bukowski, & Parker, 1998)。この児童期の集団化が、後の中学校における仲間関係の初期段階であると捉えられると指摘されており (小泉, 1995; 岡田, 1993)、集団化によって生じる仲間からの圧力による弊害や集団による問題行動の抑制を促す教育は、小学校高学年においてこそ必要であると考えられる。

黒川・吉田 (2005) では、社会的アイデンティティ理論を基に論じられてきた集団境界を越えることに関して、主観的な移動可能性を示す概念である集団透過性 (group permeability) を、仲間集団に応用させて用いている。仲間集団透過性、知覚された集団透過性、個人の集団透過性という3つの概念が提唱されており、これらの概念定義はされていたが、相互の関連についての詳細な説明を欠いていた。そこで本研究では、これらの概念について、さらに詳細に述べることにする。

集団透過性とは、ある集団を仮定した時に集団成員全体の集団境界の透過可能性を指す。集団透過性は集団を対象に測定する概念であり、集団ごとに得点が算出される。集団に所属する各成員の透過性の総和あるいは平均や中央値によって得点化される。

集団に所属する各成員の透過性は、個人の集団透過性という言葉を用いる。個人の集団透過性は、集団境界に対する個人レベルの評定を指す。当該個人が集団境界を越えられる程度を示している。これまでの幾つかの結果では、個人の集団透過性は2因子解になる結果 (黒川, 2005) と1因子解になる結果 (黒川・吉田, 2006) が報告されている。2因子解の場合、「集団外成員受容」因子と「能動的な集団外成員との関わり」因子から構成さ

れ、それらはある仲間集団の中からの視点で、仲間集団境界の外から内への透過性と内から外への透過性を示している。また、1因子解の場合は集団境界に対する評定として2因子解の概念を包括する上位概念となって算出されていると思われる。調査におけるサンプル数 (統計的な結果の安定性) から、1因子解とみなす方が良いと考えられる。

一方で、集団透過性に対する各仲間集団内成員の認知は一律ではないと考えられ、知覚された集団透過性という言葉を用いて、集団透過性と弁別する。知覚された集団透過性は、各個人の集団透過性に関する認知であるから、集団成員の数だけ存在する。そのため、認知的な歪みや誤差から集団内の各成員の知覚された集団透過性で求められた値の総和、あるいは平均や中央値によって、知覚された集団透過性を測定できるものではない。

これらの概念間の関連については、知覚された集団透過性と個人の集団透過性との間に高い有意な正の相関があることが一貫して示されており (黒川・吉田, 2005, 2006)、集団透過性と個人の集団透過性にも関連がある可能性が示唆されている。しかし、仲間集団の同定の難しさなどから、個人の集団透過性と集団透過性の関連は報告されてこなかった。

そこで研究1では、これまで検討されていなかった集団透過性と個人の集団透過性の関連について検討する。個人の集団透過性と知覚された集団透過性の高い相関から、個人の集団透過性は仲間からの影響を受けていることが予測されるため、研究2では個人の集団透過性を規定する仲間からの影響について明らかにする。

研究1

集団透過性は個人の集団透過性の総和あるいは平均や中央値によって算出されるものであるが、これらには仲間関係における個人と集団との関係を反映した関連があることは明らかにされていない。集団透過性が個人の集団透過性の単なる集合体でしかないならば、個人の集団透過性は個人レベルの仲間集団以外の成員に対する受容と排斥を意味するものでしかない。

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

2) 名古屋市立常磐小学校

本研究では、個人と集団との関係を示す変数として、仲間からの拒否に対する敏感さを扱う。仲間からの拒否に対する敏感さは、仲間集団の他成員から「浮いているように見られたくない」「変な人だと思われたくない」など、集団から逸脱してしまうことを避けたいと思う程度を測定できる概念である(杉浦, 2000)。仲間からの拒否に対する敏感さが高ければ、集団からの逸脱を避けるために、集団の他成員と同じように行動しようとすると考えられる。このことは対人関係についても言及できると考えられる。仲間から拒否を受けたくない児童は、仲間が仲間以外の児童と関わりをもっていないのならば、同様に振舞うと予測できるし、仲間が仲間以外とも関わりをもっているのならば、それと同じように行動すると予測できるのである。換言すれば、拒否に対する敏感さが大きいほど、仲間集団透過性と個人の集団透過性の偏差は小さくなると予測されるのである。この関係が充たされれば、個人の集団透過性は個人レベルの評定ではあるが、集団から影響を受けて、内在化されている可能性があることを示すことができる。そこで、以下のような仮説を立てた。

仮説：仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さが高いほど、集団透過性からの個人の集団透過性の偏差は小さいだろう。

方 法

調査対象者 公立小学校の5年生38名(男子17名, 女子21名)である。

手続き 調査時期は、2006年5月～6月であった。質問紙の実施とおよそ1ヶ月間に渡る観察によって行った。質問紙は、担任教師の下で実施した。

質問紙の構成 (a)仲間の人数：調査対象者と同じクラスの人の中で、「休み時間や昼休みをよく一緒に過ごしている人数」を質問した。この項目は、観察データの信頼性を得るために行った。(b)個人の集団透過性：黒川・吉田(2006)で用いられた項目を使用した。本研究では、児童が理解し易いように、「仲間」は「遊び仲間」としている。遊び仲間とは、(a)で回答を求めた概念と同じであることを教示した。「ぜんぜんあてはまらない～かなりあてはまる」の5段階評定である。(c)仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さ：杉浦(2000)の親和動機尺度の下位因子である拒否不安を参考にした7項目を使用した。「ぜんぜんあてはまらない～かなりあてはまる」の5段階評定である。

観察 観察は実施校との相談の上、ビデオ撮影は行わなかった。また、複数の研究者が学級に入ることは、児童に多大な負荷が掛かり、さらには観察者効果によって対

人関係が変容する恐れがある。そのため、第1著者1名のみによって観察が行われた。観察となった場面は、休み時間や授業時間などであった。最初の1週間は、観察者と児童の信頼関係の形成や、観察者が児童の名前を覚えるための期間として、測定は行わなかった。測定は、第2週目から第4週目まで3週間継続して行われた。**観測変数** 観察は仲間集団を同定する目的で行われた。観察条件に制約があるため、細かいカテゴリーの設定は行わず、相互作用のみに着目した。本来相互作用には、そのきっかけとなった出来事や働きかけの方向性などを考慮するとより好ましいが、本研究ではそれらが困難であった。測定対象となった場面(休み時間や昼休み)において、1度でも相互作用があれば、1と得点化し、相互作用がなければ0と得点化した。グループとして同じ遊びを共有している場合は、その遊びに関わっている成員全てを1と得点化した。行と列に個人を置くマトリックスに得点化を行った。

ソシオメトリック・テスト 本研究では、観察者が1名であったことで、観察における信頼性が求められなかったため、信頼性を補う目的で参照した。このソシオメトリック・テストは、本研究の目的のために実施されたのではなく、担任教師が課外学習の班構成を目的として行ったものである。3人制限法によって受容選択のみを測定し、排斥選択に関する回答は求めていなかった。

結 果

各変数の分析 個人の集団透過性に関する一部の欠測値に対して、平均推定により補っている。その他の欠測値についてはその都度分析から除外している。

質問紙の結果

仲間集団の人数 男子の回答した平均の仲間の人数は9.0人($SD = 4.0$)、女子の回答した平均の仲間の人数は6.5人($SD = 3.6$)であった。

個人の集団透過性 確認的因子分析(主因子法)の結果、負荷が低い項目が1項目あったことから、その1項目を剰余項目とした。内的整合性は5項目で $\alpha = .73$ であった。そこで5項目の得点を加算して個人の集団透過性得点とした。

性差を求めるために t 検定を行ったが、有意な差はみられなかった($t(36) = 0.40, n.s.$)。

仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さ 因子分析(主因子法)の結果、1因子解であった。内的整合性は $\alpha = .81$ であった。そこで、7項目の得点を合計し、尺度化を行った(Table 1)。

Table 1 拒否に対する敏感さの因子分析結果

どんなときでも遊び仲間の機嫌をそこねたくない	.75
遊び仲間と対立しないように注意している	.69
遊び仲間から仲間はずれにされたくない	.66
遊び仲間から“変な人”だと思われたくない	.64
遊び仲間から嫌われたくない	.61
遊び仲間から浮いているように見られたくない	.58
遊び仲間の中では、できるだけ敵は作りたくない	.51
二乗和	2.84
寄与率 (%)	40.5

観察の結果

仲間集団の同定 観察対象となったのは、休み時間と昼休みの25場面と授業時間の1場面の計26場面であった。横断データでは1回の測定誤差が大きい、縦断研究ではそれらの誤差を小さくすることが可能である。学級全成員の相互作用頻度のレンジは0~21(回)であった。相互作用が多いほど、対人距離が小さくなると考え、最大相互作用頻度である21を0に変換し(0を21に変換)、対人距離行列(ユークリッド距離)を作成した(得点が高くなるほど、対人距離が遠くなるように変換した)。ユークリッド距離は解釈が容易なように2乗し、平方ユークリッド距離とした。

対人距離行列を基に、分析は多次元尺度法を用いた。ストレスの減衰状況が第1次元から.54 .29 .19 .15 .12となっており、第3次元で.20以下になっていることから、3次元を採択した。3次元の解釈による説明率は

RSQ = .82であり、十分であることが示された (Figure 1, 2)。

布置されたグラフにおいて、ある点(児童)から最も近い点の集合を仲間集団と判断した。その際、点間距離が比較的ある児童に関しては、仲間か否か判別することが困難であったために、3人制限のソシオメトリック・テストの結果を参考にした。その結果、5つの仲間集団があることが判別可能であった。5つの仲間集団はそれぞれ4人集団が1つ、6人集団が2つ、10人集団が1つ、12人集団が1つであった。いずれの仲間集団にも所属していない児童はいないと解釈できた。ソシオ・マトリックスでは視覚的に4つの仲間集団が観測されるが(Figure 3)、多次元尺度法では4つのうちの1つがさらにサブ・グループに分かれる結果となり、観察法によって得られた結果の信頼性はあると判断できる(Figure 1~3の記号は対応している)。また、質問紙(a)による自己報告の場合でも、仲間がいない(0人)と回答している児童がいなかったことも、多次元尺度法の測定からいずれの仲間集団にも所属していない児童はいないと解釈できたこととも一致しており、信頼性があることを支持している。

集団透過性 多次元尺度法によって同定された仲間集団ごとに、個人の集団透過性の中央値を算出した。なお、平均値ではなく中央値としたのは、仲間集団は小集団であるため、中央値の方が頑健なためである。各中央値は、4人集団(ハート)では22.5、6人集団(三角)では18、10人集団(丸)では21、6人集団(星)では17.5、12人集団(四角)では19.5であった。これらの値が各集団の集団透過性である。

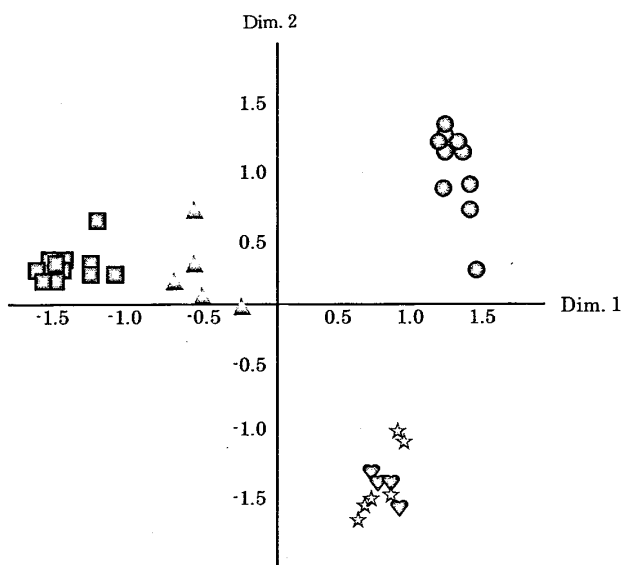


Figure 1 多次元尺度法による第1次元と第2次元への児童の布置

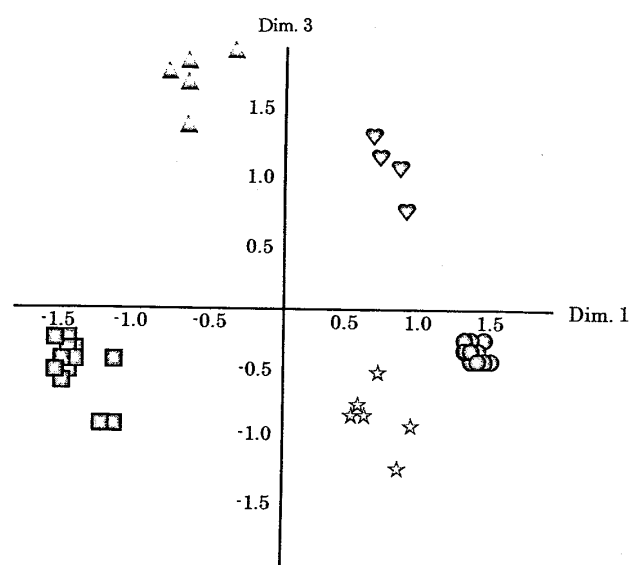


Figure 2 多次元尺度法による第1次元と第3次元への児童の布置

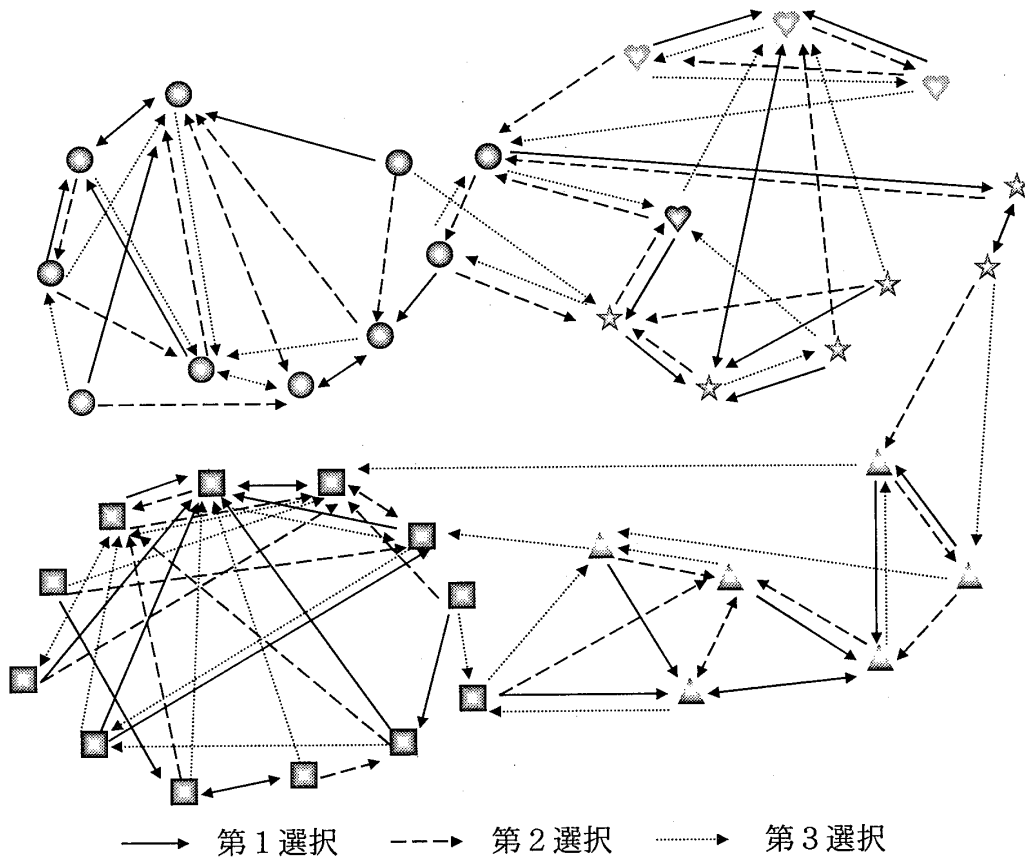


Figure 3 ソシオ・マトリックス

次に、所属する集団ごとの集団透過性（中央値）からの偏差を算出した。中央値からの偏差は、集団透過性と個人の集団透過性が掛け離れている程度を示している。

仮説の検証

集団透過性からの個人の集団透過性の偏差と仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さの関連 仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さを独立変数、集団透過性からの個人の集団透過性の偏差を従属変数とした単回帰分析を行った。その結果、モデルは有意であり、有意な負の影響があることが示された ($\beta = -.45, p < .01$)。仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さが高いほど、集団透過性からの個人の集団透過性の偏差は小さいことが示され、仮説を支持した。

考察

本研究は、これまで提唱されてきた仲間集団透過性に関する概念的定義の再吟味を行った。その中でも集団透過性と個人の集団透過性の関連に着目し、これらの概念間の関係を明らかにした。

集団透過性は個人の集団透過性の総和あるいは平均や

中央値によって算出され、集団ごとに異なるものであるとされてきた。しかし、集団透過性は個人の集団透過性の単なる集合体であるのか、それとも相互に関連して形成されているものであるかは明らかではなかった。そこで本研究では、1ヶ月間に渡る児童の相互作用の観察や、ソシオメトリック・テスト、自己報告による仲間の人数の報告など、複数の方法から信頼性の高い仲間集団を抽出し、集団透過性と個人の集団透過性の関連をみた。集団透過性と個人の集団透過性との関連を調べるために、本研究では、仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さを用いた。集団透過性が個人の集団透過性の単なる集合体ではなく、関連があるとしたら、仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さが大きいほど、集団透過性からの個人の集団透過性の偏差は小さくなると考えたからである。つまり、拒否に敏感な者は、集団の他成員とは違ったことをしないように、偏向者とならないようにすると考えられ、集団全体を示す集団透過性からの逸脱した個人の集団透過性を示すとは考えられないと予測できるのである。結果は仮説を支持し、仲間集団の他成員からの拒否に対する敏感さが高いほど、集団透過性と個人の集団透過性との偏差は小さいことが明らかとなった。

したがって、個人の集団透過性は集団からの影響を受けて決定される変数であることが示された。個人の集団透過性という概念は、単なる個人の受容・排斥に置き換えられる変数とはならず、集団からのダイナミックな影響を考慮した変数であるということができる。ただし、本研究の結果は、同じ集団に所属することは、同じ個人の集団透過性をもつという予測には結びつかない。なぜならば、同じ仲間集団にいても、その集団の中での地位によって個人の集団透過性は異なることが示されている(Kurokawa, 2006)。仲間集団内の地位によって、ある成員は集団外成員に対して排斥を行うが、別な成員はあまり排斥を行わないというように、分散はあると考えられる。

最後に本研究の制約であるが、3人制限のソシオメトリック・テストには、1) 3人回答する相手がいない場合、回答したくないのに3人を記述しなければならない、2) 3人以上選択したい相手がいる場合、回答する相手は変動し易くなる、3) 同順位の重みの個人差がある、4) 選択されていない児童への情報が全くない、などの問題があり、相互作用によって同定した仲間集団とは必ずしも一致するものではなかった。また、観察を行う制約から、観察の信頼性を補うために幾つかの測定法を併用したが、観察自体の信頼性を求めることができなかつた点は問題である。相互作用頻度が高いことは、対人距離が近いとしたが、相互作用には喧嘩などのネガティブな相互作用も考えられる。本研究では、喧嘩やいざごぜは見られなかったが、相互作用の質的側面は検討の余地がある。

研究2

研究1では、個人の集団透過性が集団透過性からの影響を受けて内在化される可能性が示唆された。そこで研究2では、個人の集団透過性を規定している仲間の要因を明らかにする。

小学校高学年は、仲間との関わりの中で、児童は仲間からどのように見られるかを特に気にする時期である(e.g., 三島, 1995)。仲間から逸脱しないように、仲間と同じように振舞おうとする。このことは、同調行動を扱った研究においても支持されている(Berndt, 1982; 藤原, 1976; Killen, Crystal, & Watanabe, 2002; Strassberg, & Wiggen, 1973)。仲間以外の学級成員と関わることは、場合によっては仲間への忠誠を裏切る行為とも解釈されるため、仲間集団の他成員からは冷たく扱われる可能性や仲間に入れてもらえなくなるという危険を伴うこともあると考えられる。そのような危険を予測したら、児童は交友関係を狭め、仲間集団以外の学

級成員との関わりをもたなくなると予測できる。

研究2では、個人の集団透過性の規定因として、仲間集団以外の学級成員との関わることにより、仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知を取り上げる。仮説は以下の通りである。

仮説：仲間集団以外の学級成員と関わることで生じる仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知は、個人の集団透過性を低めるだろう。

中学生を対象にした杉浦(2000)の研究では、女子の方が男子よりも拒否不安が高い結果が得られている。したがって、男女別の分析において、仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知は、女子の方が男子よりも高い結果が得られることも予測される。

また、黒川・吉田(2006)で示された個人の集団透過性から級友適応への影響も再度分析に加えて検討を行う。

方法

調査対象者 公立小学校5年生158名(男子75名, 女子83名)であった。

手続き 調査時期は、2006年5月であった。質問紙を担任教師の下で行った。

質問紙の構成 (a)仲間集団：研究1と同様に、自分の仲間集団を識別させるために人数を回答させた。(b)個人の集団透過性：研究1と同様の6項目である。(c)仲間集団以外の学級成員と関わることで仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知：仲間集団以外の学級成員と接した場合に、仲間から受ける制裁を推測させ、回答させている。「遊び仲間以外の人と遊んでいると、遊び仲間からは冷たい目で見られる」「遊び仲間以外の人と遊んでいると、遊び仲間に入れてもらえなくなる」「遊び仲間以外の人と遊んでいると、遊び仲間から信頼されないようになる」の3項目からなる。「ぜんぜんあてはまらない～かなりあてはまる」の5段階評定である。(d)級友適応：浜名・松本(1993)の作成した学級適応尺度のうち、級友との関わりの項目を用いた。原尺度は6項目であるが、(a)と測定している内容が重複する1項目を除いた5項目を使用した。「ぜんぜん思わない～いつも思う」の5段階評定である。

結果

個人の集団透過性 確認的因子分析(主因子法)の結果、1因子解が確認された。内的整合性は6項目で $\alpha = .73$ であった。そこで6項目の得点を加算して個人の集団透過性得点とした(Table 2)。

性差を求めるために t 検定を行ったが、有意な差はみられなかった($t(145) = .82, n.s.$)。

Table 2 個人の集団透過性尺度の因子分析結果 (研究2)

私は、「遊び仲間」以外の人を受け入れられる	.68
私は、できるだけ多くの友だちを作りたいと思っている	.67
私は、「遊び仲間」以外の人とよく遊んでいる	.60
私は、「遊び仲間」以外の人との友達が多い	.52
私は、「遊び仲間」の人とだけ遊んでいる*	.51
私は、「遊び仲間」以外の人を仲間に入れてあげない*	.41
二乗和	1.97
寄与率 (%)	32.8

注) *は逆転項目であり、得点を逆転させている

仲間集団以外の学級成員と関わることで仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知 因子分析 (主因子法) の結果、1因子解であった。説明率は63.3%であり、内的整合性は $\alpha = .83$ であった。

性差を求めるためにt検定を行ったところ、有意な差がみられた ($t(150) = 2.4, p < .05$)。女子の方 ($M = 8.1$) が男子よりも ($M = 6.9$) 有意に高かった。

級友適応 主因子法の結果、1因子性が確認された。説明率は37.5%であり、内的整合性は $\alpha = .73$ であった。

仮説の検証 分析は性別で母集団を分け、多母集団同時分析によって行った (Figure 4)。モデルは採択され、適合度も高い値を示した。男子のモデルでは、仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知と個人の集団透過性には有意な関連がなく、個人の集団透過性から級友適応へのパスが有意であった。女子のモデルでは、仲間集団の他成員から受ける制裁の予測認知と個人の集団透過性に有意な負の関連がみられ、また個人の集団透過性から級友適応へのパスも有意であった。男子と女子のモデル

から、男子と女子では制裁の予測認知から個人の集団透過性へのパスが有意に異なることが明らかとなった ($CR = 1.66, p < .05$)。一方で、個人の集団透過性から級友適応へのパスは有意に異なるものではなかった ($CR = 0.68, n.s.$)。

考察

研究2では研究1の結果を踏まえて、個人の集団透過性が仲間から受ける規定因として、仲間から受ける制裁の予測認知を取り上げて、検討を行った。またその影響には性差があり、女子の方が男子よりも高く認知すると予測した。

構造方程式モデリングによる多母集団同時分析の結果は、男女によって異なる構造をもつことが明らかとなった。仲間からの制裁の予測認知は、女子児童にとっては個人の集団透過性を低める規定因として機能していたが、男子児童においては規定因とはなっていない。この差は有意であり、女子児童は仲間からの制裁を予測することで、不安を喚起させ、仲間集団以外の学級成員との関わりをもたないようにするのに対し、男子の仲間集団以外の学級成員との関わりは、仲間からの制裁を受ける認知による影響はないことを示している。この結果は、女子児童の方が仲間からどのように見られるかを気にするという三島 (1995) や杉浦 (2000) の指摘を支持し、女子児童は拒否不安が高いことにより、仲間からは逸脱しないように、集団からは離れないようにと気を遣っていると考えられる。女子の方がより固定化された関係をもち易く (楠見, 1986)、凝集性が高い関係を築いており、男子よりも親密な結びつきを示していることがこれまでの研究で示されている (Bukowski, Hoza, & Boivin, 1994; Bukowski & Kramer, 1986; Parker & Asher, 1993)。つまり、女子の方が仲間から冷たい目で見られることは仲間を失うことや孤立することに直結

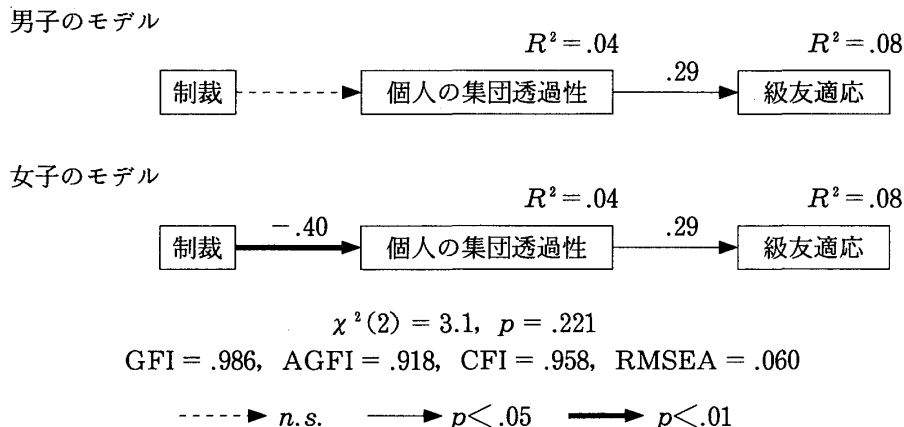


Figure 4 多母集団同時分析の結果

し易いのである。

これまでの幾つかの研究の結果 (e.g., 黒川・吉田, 2006) を支持し, 個人の集団透過性には有意な性差がないことが示された。一般に女子児童の方が男子児童よりも, 外からの受容を拒み, 能動的な仲間集団以外の成員との関わりを控える傾向にあると考えられているが, 個人レベルでの仲間集団以外の学級成員との関わり方自体に性差があるのではなかった。一般に言われていることと, 実証データの齟齬は, 個人の集団透過性を説明する要因の違いがあることで生じると考えられる。制裁の予測認知のような仲間との情緒的な結びつきを示す要因が女子の個人の集団透過性を規定していることが考えられるため, 女子の方が仲間とまとまっていて, 透過性が低いと考えられてしまうのであろう。

個人の集団透過性から級友適応へのパスは黒川・吉田 (2006) の結果を支持した。仲間集団を形成しがちな小学校高学年では, 仲間集団内の関係はもちろんのこと, さらに大きな集団の枠組みである学級集団への適応には, 仲間集団以外の学級成員との関わりが重要な要因となるのである。また, 個人の集団透過性から級友適応へのパスには性差はなく, 仲間集団以外の学級成員との関わりは女子だけに重要であるというわけではないことが示された。

最後に今後の展望であるが, 女子は仲間の目を気にすることで個人の集団透過性を低めることが明らかとなったが, 男子の場合は本研究からは明らかにならなかった。女子同様に, 男子も級友適応に個人の集団透過性の影響があることから, 男子に特有な個人の集団透過性の規定因を明らかにすることが望まれる。男子は, 女子よりも仲間と道具的な関係をもっているため, それらの要因が規定因となっている可能性がある。

結 語

本研究では, 個人の集団透過性と集団透過性の関連を検討し, 個人の集団透過性は集団透過性からの影響があることが示唆された。そのうえで, 個人の集団透過性に対する仲間からの規定因について, 仲間から受ける制裁予測の視点から検討を行った。女子の場合のみ, 仲間集団以外の学級成員と関わることは, 仲間集団の他成員から制裁を受けると強く認知しており, その影響で個人の集団透過性が低められるというモデルが検証された。

引用文献

Berndt, T. J. 1982 The features and effects of friendship in early adolescence. *Child*

Development, 53, 1447-1460.

Bukowski, W. M., Hoza, B., & Boivin, M. 1994 Measuring friendship quality during pre-and early adolescence: The development and psychometric properties of the friendship qualities scale. *Journal of Social and Personal Relationships*, 11, 471-484.

Bukowski, W. M., & Kramer, T. L. 1986 Judgments of the features of friendship among early adolescent boys and girls. *Journal of Early Adolescence*, 6, 331-338.

藤原正光 1976 同調性の発達の变化に関する実験的研究 *心理学研究*, 47, 193-201.

浜名外喜男・松本昌弘 1993 学級における教師行動の変化が児童の学級適応に与える影響 *実験社会心理学研究*, 33, 101-110.

Killen, M., Crystal, D. S., & Watanabe, H. 2002 Japanese and American children's evaluations of peer exclusion, tolerance of differences, and prescriptions for conformity. *Child Development*, 73, 1788-1802.

小泉令三 1995 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討 *福岡教育大学紀要 (第4部, 教職科編)*, 44, 295-303.

Kurokawa, M. 2006 Features of peer-group permeability between classes on elementary school children. Poster presented at the 26th of International Congress of Applied Psychology, Athens, Greece.

黒川雅幸・吉田俊和 2005 仲間集団以外の学級成員との関わり方が級友適応に及ぼす影響 *日本教育心理学会第47回総会発表論文集*, p265.

黒川雅幸・吉田俊和 2006 閉じた仲間関係が級友適応に及ぼす影響過程の検討 *日本グループ・ダイナミックス学会第53回大会発表論文集*, pp. 212-213.

楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級雰囲気, 学級モラルに関する研究, *教育心理学研究*, 34, 104-110.

三島浩路 1995 集団内いじめの予防と解消 *特別活動研究*, 28, 50-53.

岡田努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 *青年心理学研究*, 5, 43-55.

Parker, J. G., & Asher, S. R. 1993 Friendship and friendship quality in middle childhood: Links with peer group acceptance and feelings of loneliness and social dissatisfaction. *Develop-*

mental Psychology, 29, 611-621.
Rubin, K. H., Bukowski W., & Parker, J. G. 1998
Peer interactions, relationships, and groups.
In W. Damon, & N. Eisenberg (Eds.), *Hand-
book of child psychology; social emotional
and personality development*. Vol.3. (pp.619-
700). New York: Wiley.

Strassberg, D. S., & Wiggen, E. 1973 Conformity
as a function of age in preadolescents. *Journal
of Social Psychology*, 91, 61-66.

杉浦健 2000 2つの親和動機と対人的疎外感との関係
教育心理学研究, 48, 352-360.

(2006年9月29日 受稿)

ABSTRACT

The Influence of Peer-group Members on Personal Permeability of the Group

Masayuki KUROKAWA, Kouji MISHIMA, Toshikazu YOSHIDA

The purpose of the study 1 was to explore conceptual relationships between group permeability and personal permeability. More specifically, the study investigated whether group permeability is merely the aggregate of the personal permeability of all members, or whether there is a reciprocal relationship between the two, with personal permeability being internalized by group permeability. It was found that the higher the sensitivity to rejection from peers, the less the deviation between group permeability and individual permeability. This result showed that personal permeability might have possibly been internalized by group permeability. Based on the results of study1, study 2 aimed at clarifying the factors by which relationships with peers influence personal permeability. Multiple-group analysis revealed that in the case of girls, higher perceptions of punishment for friendship with non-peers resulted in lower personal permeability on girls.

Keyword: group permeability, personal permeability of the group, sensitivity to rejection, punishment for friendship with non-peers, school morale